

インタビュー日：平成30年12月19日

歌手 岩崎宏美さん



大阪の印象など

—— 今日是大阪弁護士会の14階にお越しいただきました。印象はいかがですか。

とてもスタイリッシュで、夜景が美しく見えるいい場所ですね。

大阪に初めて来たのは、EXPO'70です。最初の家族旅行で父の車で京都まで行って、そこから電車で万博に行ったのかな。大阪は、「ヤンタン」にレギュラーで出ていてなじみがありますが、とにかく活気のある街ですね。昔、私が新人の頃、生放

送で「ヤングおー！おー！」という番組があり、当時は、三枝さんが司会で、さんまさんもいて、私は関西弁に慣れていなくて、けんかしているみたいで、ちょっと怖いという感じだったんですけども、「ヤンタン」をやってから全然印象が変わりました。今日も関西テレビでの収録があったんですけども、街頭インタビューでの一般の人たちの対応が、みんなプロの嘶家さんみたいなんですよ。みんな自由にしゃべって、これが関西なんだと思いました。

デビュー当時のこと

—— デビューされたのは何年ですか。

昭和50年4月25日、「天まで響け!! 岩崎宏美」というキャッチフレーズで「二重唱 (デュエット)」という曲でデビューしました。

—— 筒美京平さんの曲ですね。「ロマンス」もそうですね。

そうです。デビューする前に、「明星」とか「平凡」を買うと歌本があって、この歌が好きだなと思うほとんどの曲の作曲者が筒美京平と書いてありました。事務所に入ったとき

に、「君のデビュー曲は阿久悠と筒美京平が書く」と言われたときに、私、運が強いんだなと思いました。

—— その当時は、どんな音楽を聴かれていましたか。

小学5年生のときから、同い年のマイケル・ジャクソンのファンで、ジャクソン5ばかり聴いていました。私はビクターレコード所属でしたが、当時ジャクソン5もビクターで、来日したら着物を着て羽田に行き、花束を渡して「ようこそ日本へ」という役をやりたいと思っていました。しかし、私が入った年にジャーメイン・ジャクソン以外はソニーに移籍してジャクソ

ンズになったので、その夢は叶いませんでした。ダイアナ・ロスやステイシー・ワンダーなどのモータウンサウンドが大好きでした。

—— ダイアナ・ロスの「Ain't No Mountain High Enough」は私もすごく好きな曲ですが、70年代のライブでよく歌われていたようにですね。

洋楽が好きだったので、外国の曲をよく日本語で歌っていましたが、それがきっかけで原曲を知ったファンの方がとてもたくさんいました。

デビューして半年の初めてのコンサートとき、持ち歌が「二重唱（デ

ュエット）」と「ロマンス」しかなかったもので、「宏美の好きな歌を2曲歌わせてあげるから何が歌いたい？」と言われたので、ロバータ・フラックの「やさしく歌って」とポール・マッカートニーの「My Love」を日本語で歌っていました。

聖母たちのララバイ

—— これまで一番セールの的によかつたシングルは何になるんですか。

「聖母たちのララバイ」で、木森敏之さん・John Scottさん作曲、山川啓介さん作詞です。40年前の歌ですが、いまだに私の代表曲になっています。



—— 「火曜サスペンス劇場」の主題歌で、毎週欠かさずテレビで流れていましたからね。

私は毎週火曜日は、大阪で「ヤンタン」の生放送に出ていたのですが、火サスは見たことがなかったんです。毎週最終の飛行機で伊丹まで来て、当時よくサラリーマンの人から声をかけられました。企業戦士のための歌とか、お父さんのための応援歌ということで「聖母たちのララバイ」は愛されていたんだというのが分かりますね。

オーケストラとの共演

—— 最近もオーケストラのライブをされているんですね。

1月20日に豊中でさせていただきました。今年初めてのオーケストラの方たちとの共演なので楽しみにしていました。今回は、もちろん自分の持ち歌の「聖母たちのララバイ」、「思秋期」の他、ミュージカルのナンバーでは、実写版の「美女と野獣」でポット夫人の吹きかえをしていたので、その「美女と野獣」。そして「レ・ミゼラブル」より「夢やぶれて」など、オーケストラならではの曲、そして初期の歌「ロマンス」も、「シンデレラ・ハネムーン」も歌いました。

—— 私、岩崎さんの曲で最高傑作だと思うのが「シンデレラ・ハネムーン」なんです。筒美京平のディスコ歌謡の最高峰だと思っています。

ありがとうございます。

—— 「好きにならずにいられない」というのもいい曲だなと思います。

それもオーケストラのコンサートで歌いました。

私は、中学のときは音楽の成績もよくなくて、1学期だけが5で、2学期から先生と仲が悪くなって立たされたことがきっかけで、それからずっと1だったんですよ。デビューした頃の頃、全然譜面が読めなくて。オーケストラの人たちは小さいときから音楽を勉強して、音大を出て、その中でも一握りの人だけしかプロになれないじゃないですか。だから、こんなぼつと出の歌手の演奏をするのは嫌だろうとか、いつもどこか後ろめたい気持ちがあったのですが、15年前ぐらいに、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団と「PRAHA」というアルバムをつくったことで自分の中でも一つ大きなハードルを越えたような気がして、私の歴史の1ページをここで変えたなと感じています。それから少し自信が出てきて、オケとの仕事も、臆することなくのぞめるようになりました。

最新アルバム

「PRESENT for you*for me」について

—— 「PRESENT for you*for me」が一番新しいアルバムですね。

はい。去年の8月15日に出了た。

—— いろいろなアーティストの方が楽曲を提供されていますが、私が驚いたのはCoccoです。このコラボはどういうきっかけがあったんですか。

この曲だけはCoccoさんから話が来たんです。「私はバレエを志していたけれどもけがをしてできなくなり、今は歌を歌っているのですが、岩

崎宏美という人は私の中ではこうだ」というお手紙つきで、2曲書いてきてくださって、その中の1曲が「つめたい火傷」という曲です。素敵な歌ですけども、私にはちょっと難しいかなと思って躊躇していたんですよ。私のディレクターは、岩崎宏美とCoccoというのはすごく面白いコラボだから、やりましょうよというのですが、なかなか首を縦に振れず、そのぐらい難しい歌なんです。

—— この曲はどこをとってもCoccoという感じがあって、他の人が歌うのはなかなか難しいのではと思いました。

そうですね。歌詞の意味も本当に飛んでるというか、印象的な言葉が多過ぎて。

—— 「両刃の剣」という言葉がいかにCoccoですね。

この曲をCoccoさんが歌っているのを車の中で聴いていたときにうちの息子が、「これ誰?」と聞くから、「Cocco」と言ったら、「えっ、Coccoの歌、歌うの?」と言われて、「いやあ、みんなが歌ったら?と言うんだけど、私には難しくて歌えそうもないの」と言いましたら、息子が力強く「岩崎宏美とCoccoのコラボっておもしろいと思うよ。この透明感は絶対歌うべきだよ」と言われたので、若い人の意見を聞いて歌いました。

—— 今回のアルバムの他の曲についてもお話を伺えますか。

一番最後に入っている「五線紙の上」という歌の作者でシンガーソングライターの境 長生さんは私の知り合いだったので、その方だけ私からお願いして作っていただきました。

阿久悠さん作詞の曲は、残された歌詞がまだたくさんあり、その詩に河口恭吾さんがメロディーをつけたものがあつたので、私がそれを選んで歌わせていただきました。

学校の先輩でもある森山良子さんにつくっていただいた「イブの物語」は、オリジナルのクリスマスアルバムをつくりたいという夢があつて、まだ実現できていませんが、それを記念する1曲目のオリジナルのクリスマスソングでもあります。

1曲目の「残したい花について」は、さだまさしさんの曲。私の還暦のお祝いに、ということで作っていただきました。今コンサートでもディナーショーでもアンコールで歌っているのですが、歌えば歌うほどいい歌だなと思って、私にとってさだまさしは本当に「生き神様」だなと思いました。

曲と活動のエピソード ピラミッド

—— 曲についての面白いエピソードがあれば教えてください。

秋になると、阿久悠さんの「思秋期」。それから「春おぼろ」という歌は、自分もいつか誰かに結婚してほしいと言われてこういう気持ちになるのかなとかね。何でも、全て歌が先行していたので、歌の後に自分がその年になり、あの歌はこういうことだったのかというのが分かるんですね。それがうれしかったり、そこで初めて胸がきゅんしたりしました。

活動のエピソードとしては、外務省のお仕事でエジプトに行った時、ピラミッドで有名なギザでステージを組んでもらったんです。ジャパンウィークで、夜9時からコンサートだったのですが、そのとき私、体調が悪くて朝から動けなかったんです。点滴を受けながらメイクしてもらって、ギザまでおなかを抱えて丸くなりながら行ったら、一緒にの車に乗っているみんなが「ひろりん、すごいよ、ピラミッド」と言うんですよ。すごく離れているピラミッドに対して、電気のない砂漠の中で電気を集めてピラミッドに照明を当てて、ピラミッドの姿が浮き上がっているのを見たら、一瞬でおなかの痛みが取れちゃったんです。だから、私、ピラミッドパワーという言葉をすごく信じています。

2年前にニューヨークでピアノだけの公演をした時も、メトロポリタンミュージアムにエジプト館があつて、自分の気持ちを落ちつかせるためにエジプトのものを見に行きました。

弁護士へのメッセージ

—— 最後に弁護士に対するメッセージをいただけますか。

2年前に父が亡くなったときの相続で、担当の弁護士の先生には物すごくお世話になりました。私、それだけでなく活字離れしているところがあるのですが、弁護士さんって活字だけで話が進むのがすごい。あと、鞆の中に資料がつまっていた、姉の弁護士、妹の弁護士、私の弁護士、みんなが集まって話し合いをしたときに、小さいペットボトルが出たんですが、大きいのだと残ったときに弁護士の方の鞆には重くて入れられないんですね。本当に大変なお仕事だと思うけれども、細かいことまで全部目を通していただいて、本当に頭が下がる思いをして一件着しました。

—— お忙しいところ、どうもありがとうございました。

ありがとうございました。

（インタビュー：大久保康弘）
写真撮影：高広信之

